

「聖書が語る平和の神」

フィリピの信徒への手紙 4 章 8～9 節

聖学院院長・キリスト教センター所長 山口 博

【終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます】

旧約聖書のエレミヤ書 6 章 13 節 14 節には「身分の低い者から高い者に至るまで皆、利をむさぼり 預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して 平和がないのに、『平和、平和』と言う」と綴られています。表面だけで平和を唱えても仕方がないということでしょう。人間が社会を作って今日に至るまで不正のなかった時代はひとつもなかったと思います。昔から今日に至るまで争いごとは絶えることはなく、悩み苦しむ人々はあとを絶ちません。そこで聖書が語る平和の神とはいったい何を伝えてくれているのでしょうか。

フィリピの信徒への手紙 4 章 9 節には「平和の神」と書かれています。「愛の神」でも「義の神」でもありません。何故でしょうか。著者パウロは「平和の神」という字を4回使っています。残りの 3 箇所を読みながら聖書が語る平和の神について示されたいと思います。

第1はローマの信徒への手紙 16 章 20 節です。「平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう」と綴られています。普通の平和のイメージとはだいぶ違います。戦う神であることがわかります。しかし武器を用いることでもなければ、目には目を持って報いるのではありません。この世の中はいつでも罪と悪との支配を受けています。悪いことをしている者は勿論ですが、攻撃をしている人間も同じように罪人だと気が付きませんと罪の支配が分かってくるまで。真の平和は我々が主イエス・キリストによって救われる他は与えられないと聖書は語るのです。つまり神はこの世を支配している罪と戦って下さる神です。神は主イエス・キリストを十字架に付けてサタンを滅ぼされ平和の神となられたと言えるであらう。通俗的な意味での平和とだいぶ違います。周知のようにローマの格言には「平和が欲しければ、戦争の用意をしろ」とありますが、それは聖書が語る意味ではありません。しかし、神の平和を得ようとするならば、戦いなしには済まないということ。そこには神の愛による戦いがあることに気付かされます。

第2番目はコリントの信徒への手紙一 14 章 33 節です。「神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです」と綴られています。14 章は礼拝の仕方が書かれているところです。当時、礼拝で異言を語る者があった。それでは教会の徳を立てる事にならないと語るのです。無秩序に礼拝の秩序を壊してはならないと語ります。預言を勧めています。神の御心を語るのです。その内容は神が人間を救って下

さることです。平和の神は礼拝の秩序が正しく守られて神の御心が明らかになる時に現れるといえる
でありましょう。だからこそわたくしどもは大学チャペル礼拝を大切にしたいのです。

最後はテサロニケの信徒への手紙一 5 章 23、24 節です。「どうか、平和の神御自身が、あなたが
たを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのな
いものとして守り、私たちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださ
いますように」と綴られています。さらに 24 節では念を押すように「あなたがたをお招きになった方は、真
実で、必ずそのとおりにしてくださいます」と書かれています。平和の神が熱心と愛と真実とを持ってわ
れわれの救いを完成して下さると語るのです。われわれは力がなく弱い者です。自分は駄目だと思
いがちです。救いは得たいと思うけど自分に力がないと考えがちです。ところがそれは杞憂です。聖書が
語る平和の神は、どのような時にもわたくしどもを丁重に守ってくださることが分かります。それが
われわれの望みです。聖書が語る平和の神は、われわれの慰めと力の神と言えるでありましょう。

2022 年 10 月 7 日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖書が語る平和」